

2020年2月以来、世界的に広がる新型コロナウイルス感染症ですが、今日までウイルスや細菌により私たちの生命を阻んできたものに、ペスト、コレラ、天然痘、梅毒、ハンセン病、マラリア、デング熱、エボラ出血熱、エイズなどがあり、麻疹、風疹、水疱瘡、破傷風、インフルエンザなどは私たちの身の回りに常に存在するものであるとされています。

2014年に発刊された『感染症の歴史』の著書、石弘之氏は「私たち人類がさまざまな苦難を乗り越えて進化してきたのと同様に、ウイルスや細菌も自らの進化のため、宿主としてありとあらゆる生き物に入り込み、時には人間を選び、あるときは壮絶な闘いをしかけ、あるときは共存関係を保つことで、40億年の長い歴史を共に歩んできた」「人と病原体との闘いは、未来永劫につづく宿命である」と述べられています。

また、近年は未曾有と言われる災害が多く、今年になってからも九州地区や北海道地区を襲った豪雨でたくさんの方々が亡くなりました。

「南無阿弥陀仏」のお念仏の教えをお聞きし、お念仏を称えていても亡くなる時には亡くなっていかれました。門徒であるからと言っても、優遇されることはありません。世間的に役に立つか立たないかと言われれば役に立たないかもしれません。

しかしながら、2500年以上に渡り、自分の足で歩いていけなくなるような生きることに苦しむ人たちが「南無阿弥陀仏」のお念仏で立ち上がり、今日までお念仏の教えが伝えられてきた歴史があります。親鸞聖人の教えをお聞きするのは、自分の人生を全うしたい。自分で自分の人生に手を合わせて命終わっていくような者になりたい。そのようなことから親鸞聖人の教えをお聞きするのではないのでしょうか。「南無阿弥陀仏」の教えは、世間の役に立つか立たないかというよりも、私たち一人一人のいのちに「これで良かった」と言えるような大きな意味を与えてくださっているのではないのでしょうか。

さて、この度の新型コロナウイルス感染症におきましても、大きな問題の一つとして「差別」の問題があげられます。

人類の歴史上、古くはペスト（過去に3度のパンデミックが確認されています）に対しては、ペスト菌の存在がわからなかった時代には大流行のたびに原因を特定の人におしつけ、「魔女狩り」が行われたり、特にユダヤ教徒を「スケープゴースト（いきにえ）」として迫害する事件が起きております。

ハンセン病につきましても、「らい予防法」によって家族や地域、そして社会とハンセン病を患った人たちとを分断してきました。明治時代に日本が世界の先進国の仲間入りをしようとする時、日常生活から発病することはほとんど無く、完治する病であることが医学的に証明されてからも、ハンセン病は「国辱病で国の恥」ということから、ハンセン病を根絶するためには強制的な収容、隔離しなければならないという認識のもと、隔離政策によって人々の目のつきにくい所へ追いやられ封印し、社会から切り離してきたのであります。残念ながら真宗大谷派でも「らい予防法」によって苦しめられている人たちに寄り添うどころか、国の政策に加担し、国の隔離政策を容認させるような慰問布教を行ってきました。この事実で大谷派の一人の僧侶として、真摯に向き合っていくことを忘れてはならないことでもあります。

また、近年ではエイズ患者に対しましても、HIV感染を理由に職場への採用が取り消されたり、医療機関で差別的な対応や診療拒否をされたりするといった差別事件が起こっております。

新型コロナウイルス感染症につきましても、感染した方やその周辺（家族や職場の同僚）では、「家に投石や落書き」、「中傷ビラがまかれる」、「取引先からコロナがうつると言われる」等、また医療機関や関係者では、「殺すぞ」「火を付けるぞ」等、外国人の方々、感染発生地域の方々等に対しても不当な差別や偏見、いじめ、誹謗中傷の発生事案が、報道やインターネット上においてたくさん取り上げられています。

感染者・濃厚接触者、医療従事者等に対する誤解や偏見に基づく差別は決してあってはならないことではありますが、果たして「本当に自分は差別していません」、「そのような目で見ることはありません」と言い切ることができるでしょうか。

私事ではありますが、新型コロナウイルスが日本国内で拡大しつつあった2月の下旬にマスクやアルコール消毒液を購入しようと、市内の薬局へ行った時のことです。中国語で会話をする男女二人の方が、マスクを購入されておられました。その時、思わず後ずさりをし、距離を取ってしまったことがありました。中国人は全て感染者であるはずはないのに、中国人イコール新型コロナ感染者であると心の中で勝手に判断した結果の軽率な行動でした。また、最近のことですが、緊急事態宣言が解除され、次第に国内の感染者数が増加する中、県外ナンバーの車を見る機会が多くなってきましたが、特に関東圏のナンバーの車を見ると、「今、この時期に上越に来なくても」と、思うてしまうことがあります。

「〈部落は怖い、ガラが悪い〉といった歪められた先入観は偏見の例である。なお、偏見は誤解とは異なるので、正しい知識を与えられても解消するとは限らない」（『部落問題・人権辞典』）とあります。「部落」の人は怖い人・ガラが悪い人という、周りの人たちの意見を鵜呑みにして、実際に会ってその人を知るということをしないで、怖いとかガラが悪いと思いつめ付けてしまっているという事も差別を生むひとつなのです。

同じように、中国人や関東圏の人を見るとその地域に住む人は感染者であると、私の勝手な思い込みで判断し決め付けてしまっているのです。差別は決してあってはならないと頭では思っても、自分では気付いていない（無自覚）、差別しているつもりはない中で、他の人を傷つけ、差別してしまっているのです。しかし、これらは厳然として私の中にある差別心なのだと思います。

清沢満之先生は、「自己とは何ぞや。これ人生の根本問題なり」（『清沢満之全集』第7巻380頁）と言っておられます。「生きている中で多くの人や物に出会いますが、私は本当に私自身と出会ったことがないのではないか、自分とは何であるか力を尽くして明らかにしていかなければならない私の人生の根本問題である。」という問いかけであります。今、まさに新型コロナウイルス感染症から我が身が問われているのであります。

合掌